

# ウクライナ交流を通して

令和4年12月19日6校時

3年生が、ウクライナの支援団体のスタッフと交流しました。9月に寄付していたお金をアロナさんが届けてくれたのです。子どもたちも登場する予定でしたが…

交流する約2時間前、ロシアから攻撃を受けたので避難したそうだ。

その頃、ウクライナはまだ朝早く、空も暗い頃だろう。

日本の中学生は給食を食べていた頃だ。

その頃、攻撃を受けたのだ。自分と同年代或いはもっと幼い子供たちが。

私は慄然とした。そして気づかされた。私たちは油断しているのだと。

子供たちは避難していて、交流することはできなかったが、そのことを残念だと言えない、言えるはずがない。

過酷かつ危険かつ理不尽な環境で強く生きる彼らが一刻も早く、安心して遊び、そして眠れる日が来ることを祈る。

『花火の音は爆弾の音を連想する。』日本人の感覚では、予想することができなかった反応だ。

これに似たエピソードが1つある。私は飛行機の音を聞くと、「どこを飛んでるのかな、私も乗りたいな。」と思う。

しかし父は、『戦闘機の音を連想する、怖い。』と言う。父は終戦後に生まれたが、同じ終戦後生まれでも、育った環境はかなり違うのかもしれない。改めて平和な環境で生きる幸せを噛みしめる。

ウクライナからロシアに強制連行された人の中には、ロシアのニュースを見て、ロシアが正しいと思った人もいるそうだ。

その意見は親子間でも割れることがあるらしく、非常に複雑なのだそう。

私自身も、世界を敵に回してまで侵攻を続けるロシアは本当に悪なのか、疑問に思うこともある。

“Welcome to Japan!!”

『楽しく行ける所ならどこでもいい。』

私たちが思う〇〇に行きたい、とは違うことが一瞬で分かった。日本人の感覚は、島の中のものでしかないのだ。

危険な状況の中で、交流をしてくださって感謝しかない。多くの刺激を受けた、この貴重な経験はとても大きなものになった。